

## ◎脳卒中・回復期リハ・ADL

座長 菅原 英和

## 3-9-7 回復期脳卒中患者のADL帰結に対する、入院中BMI変化率、入院時SMI・BMIの影響

<sup>1</sup>東京湾岸リハビリテーション病院リハビリテーション科, <sup>2</sup>慶應義塾大学医学部リハビリテーション医学教室  
 近藤 国嗣<sup>1</sup>, 中館 陽恵<sup>1</sup>, 富岡 曜平<sup>1</sup>, 上垣内梨恵<sup>1</sup>, 補永 薫<sup>1</sup>, 松浦 大輔<sup>1</sup>, 忽那 岳志<sup>1</sup>,  
 數田 俊成<sup>1</sup>, 大高 洋平<sup>1,2</sup>, 里宇 明元<sup>2</sup>

【目的】昨年我々は本学術集會にて、回復期脳卒中患者のADL帰結とBMI(body mass index)・SMI(skeletal muscle index)との関連で、退院時FIM(運動項目)を目的変数とした重回帰分析において、男性例では入院時肥満が負の、入院時SMIが正の説明変数であることを報告した。今回、回復期入院中のBMI変化がADL帰結に影響を与えるかについて、入院時BMI, SMIを含めて検討した。【対象】08年7月~11年12月に当院を通常退院した脳卒中患者、男性535例(65±12歳)、女性378例(70±13歳)【方法】退院時FIM(運動項目)を目的変数とし、入院時BMI(やせ、普通、肥満、高度肥満の4群に分類)とSMI、入-退院時間のBMI変化率、年齢、病型、発症から入院までの期間(発症後期間)、入院期間、入院時FIM(運動項目)を説明変数とし、ステップワイズ法にて変数を採択し有意性を検討した。解析は男女別で施行し、さらに75歳未満と以上群に分けても解析した。SMIはBIA(bioelectrical impedance analysis)法にて算出した。【結果】男性全体では入院時SMI, BMI変化率、脳出血、入院期間、入院時FIMが正の、やせ、高度肥満、発症後期間、年齢が負の説明変数となった。一方、75歳以上群ではSMI, BMI, BMI変化率の3項目が全て採択されなかった。女性全体では3項目のうちBMI変化率が正の説明変数として有意であったが、75歳以上群では全て採択されなかった。【考察】回復期入院中のBMI変化がADL帰結に影響を与えることが示唆されたが、75歳以上例においては影響しない可能性がある。

## 3-9-8 訓練時間とFIM利得との関係—日本リハビリテーション医学会リハビリテーション患者データベースの分析—

<sup>1</sup>熊本機能病院リハビリテーション科, <sup>2</sup>日本福祉大学社会福祉学部  
 徳永 誠<sup>1</sup>, 近藤 克則<sup>2</sup>

【目的】1日あたりのリハビリテーション(リハ)単位数(以下、訓練時間)の増加が、回復期リハ病棟における脳卒中患者のFunctional Independence Measure(FIM)利得(退院時FIM-入院時FIM)を向上させるのかを複数の病院データで明らかにする。【対象と方法】対象は、日本リハ医学会のリハ患者データベースに登録された脳卒中患者3,590例から選択基準を満たした24病院、1,081例。登録データが69例以上の5病院(A~E病院)に着目して病院別でも分析した。訓練時間は、2単位未満群から8単位以上・9単位未満群まで1単位刻みで8群に分けた。そして、5病院と8群の訓練時間、合わせて40群に層別化して、その平均FIM利得を調査した。【成績】A~E病院とその他の病院の6群間で、年齢、発症から入院までの日数、在院日数、入院時FIM, FIM利得、訓練時間に有意差を認めた。全体では訓練時間とFIM利得との間にほとんど相関がなかったが、訓練時間は病院毎に中央値で3.0~6.8単位と大きく異なっていたので病院別に分析した。5病院のうち4病院では、2単位未満群~7単位以上・8単位未満群の範囲では、訓練時間が長い群で平均FIM利得が大きく、3病院では訓練時間とFIM利得との間に有意な正の相関を認めた。【結論】病院別訓練時間群別で層別化すると、8単位未満の範囲では、4病院で訓練時間が多いほど平均FIM利得が大きかった。リハ医療の質も考慮すべき要因の一つと考えられた。

## 3-9-9 喫煙脳卒中患者と非喫煙脳卒中患者の回復期リハ病棟における調整FIM利得

<sup>1</sup>熊本機能病院リハビリテーション科, <sup>2</sup>熊本市立熊本市民病院神経内科  
 徳永 誠<sup>1</sup>, 渡邊 進<sup>1</sup>, 中西 亮二<sup>1</sup>, 山永 裕明<sup>1</sup>, 橋本洋一郎<sup>2</sup>

【目的】喫煙が脳卒中の危険因子であることは広く認識され、禁煙が強く推奨されているが、喫煙者の方が非喫煙者よりも脳卒中の予後が良いという報告がある。本研究では、喫煙脳卒中患者と非喫煙脳卒中患者の回復期リハビリテーション病棟におけるFunctional Independence Measure(FIM)利得(退院時FIM-入院時FIM)の違いを明らかにすることを目的とした。【方法】脳卒中患者1,409例を対象とし、喫煙者(292例)と非喫煙者(1,117例)で平均FIM利得に違いがあるか調査した。また年齢と入院時FIMで12群に層別化した非喫煙者の患者数分布を用いて喫煙者の平均FIM利得を補正し、喫煙者の調整平均FIM利得を求めた。【成績】平均年齢は、喫煙者(62.5歳)が非喫煙者(70.8歳)よりも有意に低かった。平均入院時FIMは、有意ではないものの喫煙者(77.0点)が非喫煙者(73.0点)より4点高かった。平均FIM利得は、有意ではないものの喫煙者(22.9点)が非喫煙者(20.5点)より2.4点高かった。しかし、喫煙者と非喫煙者の間で、8.3歳あった年齢の違いを0.4歳に、4.0点あった入院時FIMの違いを0.3点に補正して得られた喫煙者の調整FIM利得は19.9点であり、非喫煙(20.5点)より0.6点低かった。【結論】調整FIM利得は、喫煙脳卒中患者の方が非喫煙脳卒中患者よりも低い。